

行動障害への指導力向上に向けたOJTプログラムの効果 I (2) —プログラムの効果の質的分析—

○肥後祥治 (鹿児島大学教育学部) 永田留菜 (鹿屋市立寿北小学校)
KEY WORDS : 行動障害 ・ OJT プログラム

I 問題と目的

「行動障害への指導力向上に向けた OJT プログラムの効果(1)ープログラムの効果の質的分析ー」において行ったOJTプログラムの結果分析から、参加者に対する知識や行動、対象者への行動に良好な結果を及ぼすことを示すことができた。本プログラムのもう一つの特徴は、実際のデータを取りながら、グループで対象者への取り組みを検討しながら取り組む形式を取ったことであった。本報告においては、このような取り組みが教師個人と教師集団としての意識に対どのような影響を与えたかについて最終アンケートの自由記述の質的分析をとおして検討することを目的とした。

II 方法

1. 参加者・期間・プログラム、データ収集および分析方法
前報と同じであった。プログラム終了時に行ったアンケートの自由記述を KJ 法で整理を行った。

III 結果と考察

「自分の行動に何かよい変化があったか」の質問には、参加者 32 名のうち、16 名が「大変あった」、12 名が「少しあった」、1 名が「変化はなかった」と答え、3 名が無回答であった。自由記述を整理した結果、A~D の大カテゴリーが抽出された。「A. 行動分析の学習による変化」に 1. 子どもの行動の見方の変化 2. 子どもの行動の記録を付ける良さ 3. 新たな対応方法の実践の 3 つサブカテゴリーとであり、その他は B. 反省的実践者としてのスタート C. 子どもの実態把握への関心の広がり D. チームアプローチへの影響と命名されたグループに整理された。

「グループにおいて 1 つの事例について取り組む活動は必要であるか」の質問には参加者 32 名のうち、24 名が「大変思う」、6 名が「少し思う」と答え、2 名が無回答であった。KJ法を用いた自由記述の整理を Fig.1 に示した。ここでは、1. 教師集団の現状、2. 情報共有による学び、3. 細部にわたる実態把握、4. 機能的なチームの形成、5. より良い指導に向けて、6. 今後の課題の 6 つのカテゴリーが抽出された。「1. 教師集団の現状」は「2. 情報共有による学び」に影響を与え、「2. 情報共有による学び」と「3. 細部にわたる実態把握」は共に、「4. 機能的なチームの形成」に影響を与えている。また、「4. 機能的なチームの形成」は「5. より良い指導に向けて」に影響を与え、「6. 今後の課題」へと続いていくと考えられた。

教師個人として参加の利点として上げられたものの多くは、行動分析固有の知識や子供の評価法とそれらから自分の指導法の妥当性に関する記述に加えて、チームアプローチによる教師間の共通理解の推進が挙げられた。また、Fig.1からは、本プログラムの特徴により、個としての教師のアプローチから教師集団としてのアプローチの以降に影響を与える可能性を示唆していると考えられる。行動障害に対応していくためには、個人の知識や技能もさることながら、教師集団としての取り組む技量が必要となると考えられる。本プログラムはその方向性に総内容を内包していると考えられる。

(HIGO Shoji, NAGATA Runa)

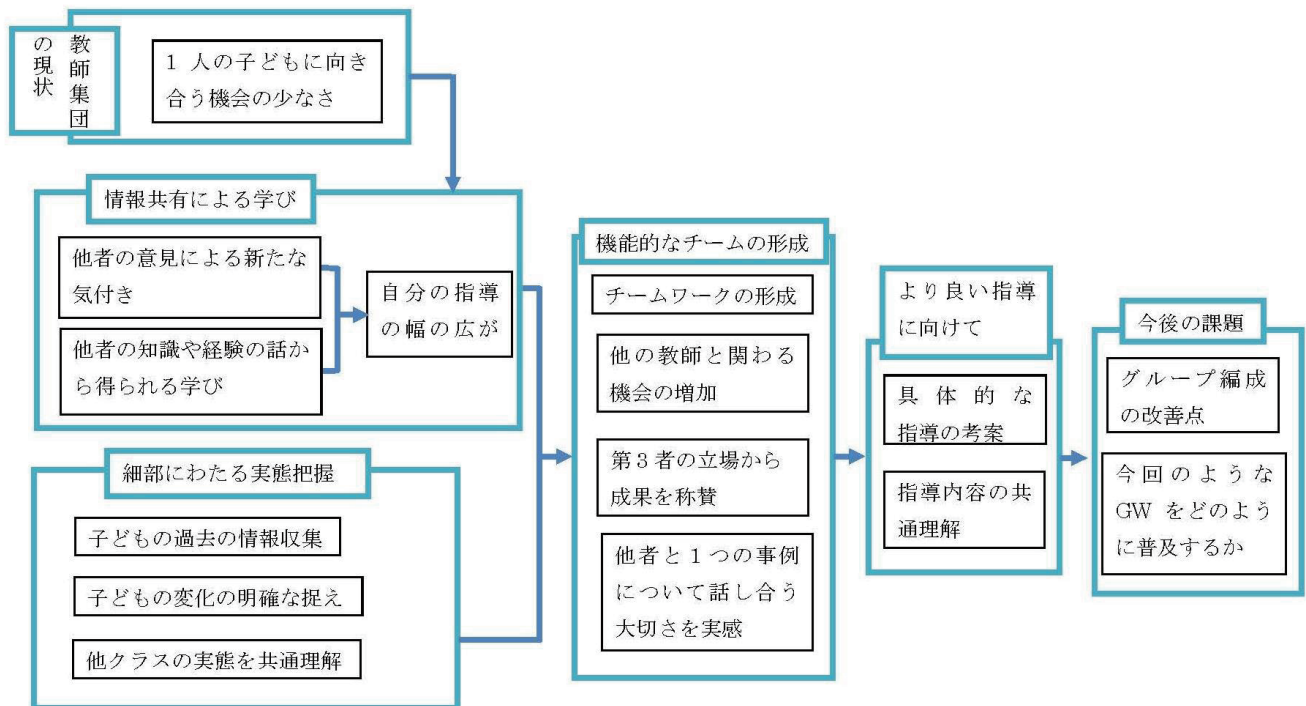


Fig.1 「グループにおいて 1 つの事例について取り組む活動は必要であるか」の整理